

思いをこめて祈りの献花

鎮魂の能楽

「海霊」を

奉納



式典への参列者は、観音崎バス停と式典会場を結ぶ三台のマイクロボスに乗車して、次々と会場に到着した。当日は、新緑したたる爽快な天候に恵まれたため、徒歩で会場にいられた人もいた。

開式の時間前には、式場内に用意された椅子（三百五十）は既に埋まり、両側は立っている参列者で立錐の余地も無い状態となった。

式典は、予定通り午前十一時に始まり、海上自衛隊横須賀音楽隊の演奏にあわせ、参列者全員が国歌斉唱・黙禱



献花をされる参列者

を行い、会長式辞・内閣総理大臣追悼の辞と進められた。

御霊の鎮魂と海洋永遠の平和を祈念して行われた黙禱の間、音楽隊によって「国のしずめ」が演奏された。

また、内閣総理大臣追悼の辞は、国土交通省海事局官房審議官・大庭靖雄氏によって代読された。

式典はこの後、来賓や各界代表の献花に続き、参列者全員がしめやかに様々な思いをこめて献花を行った。

式典の最後は、戦没船員と生死を共にされた故宮越賢治船長が、御霊の鎮魂を願って作詞され、二十五世観世左近元正氏が作曲された能楽「海霊」が観世一門によって奉納された。

式典の後は、恒例によって京急ホテルで懇親会が行われた。

今年の式典にも、戦後六十年を経過して初めてこのような追悼式を知った多くの戦没船員のご遺族・OB船員などが参列された。

追悼式典では次の方々に代表献花を賜りました

○来賓・各界代表献花者（敬称略）

- 堀田 明道（全国戦没・殉職船員遺族会会長）
- 澤田 秀男（横須賀市長）
- 大庭 靖雄（国土交通省海事局官房審議官）
- 武居 智久（防衛庁海上幕僚監部監理部副部長）
- 小澤 勇（海上自衛隊横須賀地方総監部幕僚長）
- 鴨田 廣志（第三管区海上保安本部総務部長）
- 田澤 新一（神奈川県横須賀土木事務所所長）
- 高井 陸雄（東京海洋大学学長）
- 上野 延之（高等海難審判庁長官）
- 東 晴二（海難審判理事所所長）
- 小川 征克（独立行政法人航海訓練所理事長）

橋本 則子（全国海友婦人会会長）

- 藤澤 洋二（全日本海員組合副組合長）
- 梅本 哲朗（日本船主協会常務理事）
- 真木 克朗（内航海運組合総連合会全日本内航海運組合会長）
- 四宮 秀毅（大日本水産会 住吉漁業株式会社代表取締役社長）

○式電をいただいた方々

- 野上 智行（神戸大学学長）
- 井上 欣三（神戸大学海事科学部部長）
- 山田 猛敏（鳥羽商船高等専門学校長）

内閣総理大臣追悼の辞

第三十五回追悼式に当たり、戦没・殉職船員の方々の御霊に対し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

先の大戦において、六万人余りの船



員の方々が尊い命を失いました。また、戦後も、海難や労働災害によって二千八百人を超える方々がその職に殉じています。

今日の我が国の平和と繁栄は、多くの尊い犠牲の上に築かれています。祖国の未来を信じて蒼海深く散った船員の方々の御霊の前で、未永い平和と海上交通の安全への誓いを新たにしますものであります。

御遺族の皆様への深い悲しみに思いを致すとともに、戦没・殉職船員の方々の安らかな眠りを心からお祈りします。

平成十七年五月十二日

内閣総理大臣 小泉純一郎

戦後六十年

初めて追悼式に参列

今年も戦没船員の碑が建立され、毎年執り行われている追悼式を知って、初めて参列された戦没船員のご遺族は多い。

この中でお話を聞くことができた佐藤登志子さん姉妹（白陽丸）と小林和子さん姉妹（あきつ丸）を紹介したい。

もっと早く追悼式を知っていたら

新潟から初めて追悼式に参列された佐藤登志子さん（六十九）と姉の岡固達子さん（七十五）は、父・河野八作氏を昭和十九年十月二十五日大阪商船・白陽丸（機関長）で亡くされた。

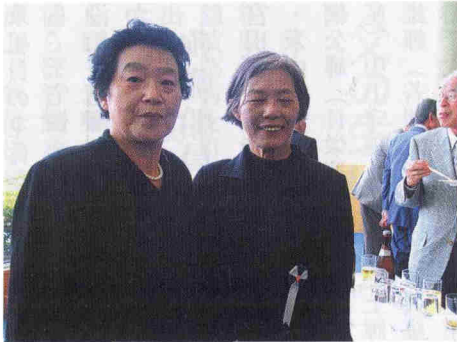
これまで戦没船員の碑のことや顕彰会のあることなど全く知らなかった。

平成十六年八月、NHKが放映した「人間ドキュメント・船の棺・戦没船員遺族の日々」で顕彰会のあることを知り、九月に新潟で開かれた「戦時徴用船遭難の記録画展」を登志子さんが見に行き、そこで戦没船員の碑のこと、父についての資料などを目にしたのが今回の追悼式への参列となった。

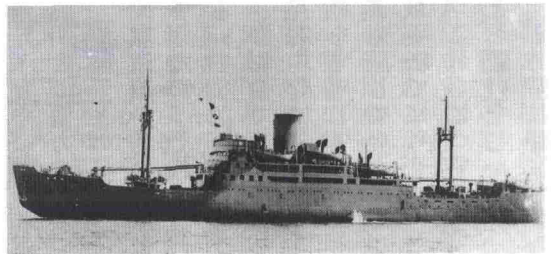
姉の達子さんは「私達一家は父の情

報を早く知るため神戸に住んでおりました。父の戦死を知ったときは、母は五人の子供をかかえ四十歳、私は女学校三年、妹は九歳、子供達は皆号泣しましたが、母は泣きませんでした。今もよく覚えております。

英語などをたしなむ理知的な母でしたから、気丈な気持ちで受け止めたのでしょう。しかしその母も、六年前に逝きました。戦没船員の碑のあることや顕彰会さんから頂いた資料で父の最期を知ることが出来ました。もっと早く分かっておればと悔やまれてなりません。追悼式に参列出来てほんとうに



岡固さん姉妹



白陽丸 大阪商船・5,742総トン・海軍徴用船
昭和19年10月25日・知林古丹島北西400メートル付近で敵潜の攻撃で被雷沈没・船員113・引揚者1,312・警戒隊26名が戦死した。

よかったです。」と涙を潤ませていた。

父の航跡をたどって 三人姉妹の旅

小林和子さん（七十三・青森市）、尻無浜洋子さん（七十一・千葉県）、大竹昭子さん（六十・鹿児島県）の姉妹三人が、初めて追悼式に参列された。昨年八月、小林さんから戦没された父・下園力矢氏とあきつ丸について電話で顕彰会に問い合わせを頂いたことから、今回の参列となった。

三人は、追悼式の後、船員だった父がたどった港や街、母と父が訪ねた思い出の場所「神戸・宇品・下関・佐世保・五島列島・伊万里など」をどこまで行けるか分りませんが、行けるところまで行こうと決めております。とく



あきつ丸 日本海運・9,186総トン・陸軍徴用船
昭和19年11月15日・五島列島福江北西40キロ付近で、敵潜の攻撃で被雷沈没・船員67・乗船部隊2,093・船舶砲兵隊140名が戦死した。



小林さん姉妹

に、最終目的地の宇久島には、あきつ丸戦死者の慰霊碑がある。対馬海流に乗って二百数十の遺体や遺品が流れ着いたのを、地元の人が茶毘に付し、供養され慰霊碑を建立されていると聞いております、と話されていた。

三人姉妹のお話に、三十七歳で逝った父と共に過ごした僅かな日々を取り戻すかの様に切ない痛哭の声だった。

碑文石のこぼれ

安らかにねむれ
わが友よなれに
波静かなれに
とこしえに

新しく奉安された 戦没・殉職船員

戦没船員

三宅 福一（第2天海丸）

三宅福一氏の奉安は、弟の三宅哲様よりのお問い合わせで奉安されていなかったことが分った。

三宅様よりはEメールをいただき、兄は大阪商船に在籍し昭和十八年船員として徴用され、海軍気象隊軍属として第二天海丸で戦没されたことが分った。

顕彰会としては、名簿から漏れた原因を再調査するための一つとして、靖国神社に問い合わせた。その結果、同神社には、昭和二十九年十月十七日付で「海軍軍属・所属部隊・八気象」として合祀されていた。

顕彰会として名簿から漏れていた原因を、今となっては把握が困難であるが、第二天海丸が海軍直轄の徴用船で

乗組員の主体が海軍であったことから、三宅福一氏が軍籍として扱われ戦没船員名簿から漏れていたのではないかと考えられる。

殉職船員

宮田普（船舶運営会） 米山吾一（船主・米山岩夫） 福田政良（横手海運） 朽網公輝（日栄運輸） 佐々木仁（濱幸水産） 中上守矢（船主・中上輝雄） 眞田雄輝（若潮水産） 岸浜喜久雄（白川汽船） 太田誠（山田水産） 虎頭邦尚（ユニトラ海運） 目原公生（船主・大間哲也） 岡田知也（早矢海運） 出口清人（マツダマリン）（敬称略）

両陛下は40分に わたり遺族と ご懇談

盛会裏に終わった
「遺族の集い」

集いの開会は、十一時であったが十時頃には既に出席者の殆どが会場前のフロアに集り、また、報道関係のカメラが両陛下ご到着の玄関前と会場内に多数配置され、催しの盛り上がった

雰囲気になった。

十時半には、出席者を会場内に案内し、顕彰会より集いの進行、とくに、



海運ビルに御着の両陛下とご先導の相浦会長

両陛下とのご懇談の進め方について、説明とご協力のお願いがなされた。両陛下とのご懇談は、それぞれ戦没殉職遺族一名ということで準備を進めてきたが、それでも百七十名近くになる。

顕彰会では、これ等の遺族を会場の左右均等に分け、さらに、同じ船や会社を考慮して十二のグループに分けてご懇談していただくことにし、事前にお手紙で知らせていた。

これらについて、再度開会前に説明とお願いをした。十一時に開会された集いは、始めに

六万三千余人の御霊の鎮魂を祈念して一分間の黙祷を行い、続いて主催者を代表して相浦会長・ご来賓の北側国土交通大臣・遺族代表の加賀城久子さん（日本郵船 りま丸）がそれぞれご挨拶をされた。

このなかで、北側大臣は「最愛の肉親を失われ、長年の悲しみに耐えながら、戦後の混乱の中を生き抜いてこられた御遺族の方々の御苦労は、並々ならぬものであったと拝察いたします。」とご遺族の労苦を労った。

遺族代表の加賀城さんは、天皇皇后両陛下のご臨席を賜って、このような催しを開いていただいたことに御礼を述べ「あれから六十年、戦後の厳しい時代はつらかったこともありましたが、また、いろいろな方々に親切にしてください、楽しい思い出もあります」と戦後を振り返り「これからも、遠くから私を見守って下さっている主人のためにも、頑張って生きて参りたいと思っております」と挨拶された。

拍手と感涙で両陛下を迎える

十一時二十分、両陛下は相浦会長のご先導でご入場になられた。

両陛下と遺族のご懇談は、全国戦没殉職船員遺族会堀田会長の献杯のご発声で始められた。

堀田会長は、両陛下が六月二十七日・二十八日の両日、サイパン島に戦没者慰霊のご旅行をなされた事に触れ、

遺族として感謝の気持ちと御礼を述べられた。

献杯の後両陛下は、少しお離れにな



ご入場される両陛下



遺族とご懇談される天皇陛下

って二・三步遺族のほうに進まれ、その場で会場ご退出の十二時まで遺族とご懇談なされた。

ご懇談を終えられた両陛下は、相浦会長のご先導で会場を後にされたが、お見送りの遺族や海事関係者は、ご入場の時とはまたひときわ強い、新たな感涙と感激の拍手で見送られた。

この後懇親は、十三時近くまで続けられ、遺族同志、あるいは生死をともにされた生還船員などの海事関係者と遺族、それぞれが思いおもいに懇親を深められていた。

この両陛下とのご懇談で、いろいろなお話が遺族からも両陛下からもなされたし、また、遺族の感慨もひとしおのものがあったと思うが、ここでは、紙面や時間の関係で割愛し、改めて「潮騷」でお知らせできるのではないかと思います。

戦後六十年で初めて対面 運命を共にされた船の遺族

前述したように、両陛下とのご懇談



遺族とご懇談される皇后陛下

のためにグループを作らせていただいたが、とくに同じ船で戦没された遺族が複数出席された船が二十隻にもおよんだ。

この方々の多くは、今回の集いで初めて同じ船であったことを知った遺族が多く、六十年を過ぎてあらたな感激の対面となった。

また、戦没船員の出身会社についても、同じ会社はグループを同じにしたの



思いおもいに懇談される出席者

で、ここでも感激の出会いも見られた。このような幾つかの出会いには、これから、毎年追悼式でも交流が深まり、さらにその輪は広がっていくと思われ。ここにも、今回の集いの意義と成果が見られた。

ご寄付の御礼

今回の集いの開催に当たり、次のような海事関係の主要団体や船社から過分なご寄付をいただきました。

また、ご出席された遺族や海事関係者の次の方々より、ご丁寧なご寄付を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

- 社団法人 日本船主協会
- 全日本海員組合
- 日本海事財団
- 日本郵船株式会社
- 株式会社商船三井
- 川崎汽船株式会社

- 宮越太郎 (佐倉市) 高垣宏江 (神戸市)
- 高垣幸徳 (神戸市) 中村良秋 (松戸市)
- 林嘉代子 (逗子市) 榊田佳明 (愛媛県西宇和郡伊方町)
- 矢内富次 (熊谷市) 吉川 榮 (東京都杉並区)
- 大石美恵香 (愛媛県越智郡上島町)
- 山本艶子 (伊勢原市) 静 友己枝 (東京都江東区)
- 河内哲夫 (岡山県久米郡久米南町)
- 三木千代子 (丸亀市)

戦没殉職船員慰霊・顕彰

六十年の主な歩み

太平洋戦争が終わって今年は六十年になる。

あの戦争は、海上輸送なくしては全く考えられなかった世界戦史に例が無い「海洋作戦」であった。そのため、商船はもとより漁船・木造機帆船など船と名のつくものは、その大半が徴用などによって戦争に参加した。

緒戦の一時を除いては、これ等わが国船舶は、常に海上輸送路の破壊に血眼になっていた米軍（連合国）の熾烈な攻撃の中で兵站の輸送に従事し、終戦とともにわが国商船隊は壊滅した。

この大戦では、七千隻をこえる船舶が喪失し、六万余人の船員が尊い犠牲となった。とくに船員の犠牲で痛ましいことは、戦没船員の約三十一パーセントを超える二万人が二十歳未満の若年船員と言うことである。

戦争が終わり、太平洋に眠る戦没船員の御霊を慰霊し顕彰するために、海運・水産の関係者が立ち上がり今日を迎えた。

また、戦後、廃墟の中から立ち上がり、わが国の復興に大きな役割を果たした海運・水産業で不幸にして海難等

で犠牲となられた殉職船員も、ある時期より慰霊・顕彰事業に加えられていた。

ここに、この六十年の慰霊・顕彰の主な歩みを振り返ってみたい。

船員軽視の援護法

その改正に立ち上がる

昭和二十七年、戦争中の公務による戦傷病死者に対する国家補償として「戦傷病者戦没者遺族等援護法」が国会に上程されたが、船員の対象者は軍徴用船での戦没者に限られ、船舶運営会の徴用船員は適用除外となっていた。遺族をはじめ関係者は、この理不尽な扱いに怒りその見直しを求めて立ち上がった。

既に、昭和二十年十月わが国における戦後初めての組合として全日本海員組合が結成され、全国各地に支部機関を設けて活躍していたので、海員組合が中心となり各地に遺族会を組織し、力を合わせて援護法の改正に取り組んだ。

その結果、約一年半におよぶ運動で

昭和二十八年八月の第十六特別国会で戦没した総ての船員遺族に対して、遡って法律が適用されることとなった。また、この運動をとおして全国一本の戦没船員遺族会が結成された。

財団法人 戦没船員の 碑建立会が設立

戦後いち早く、戦没船員と生死をともにした有志などにより、慰霊碑建立の運動がはじめられたが、占領下の特殊事情はこれを許さず、二十数年の空白がむなしく経過した。

昭和四十四年七月、業界・各船員関係団体等多くの方々の努力により「財団法人 戦没船員の碑建立会」が設立された。

建立会が先ず手がけた仕事は、碑建立に必要な募金への取り組み・碑建立候補地の選択・戦没船員名簿の作成等であった。

戦没船員の碑が完成

建立に向けての諸準備は、関係団体挙げての全面的な協力、さらに広く一般国民からの支援もあり順調に進み、募金目標一億四千万円を達成、建立地を東京湾が眼下に一望できる神奈川県観音崎公園内に四、二八八平方メートルの敷地が確保され工事に着工した。



鑑入れをされる南波佐間副会長
(全日本海員組合組合長)

これと並行して、厚生省援護局の原簿を基に碑に奉安する戦没船員の調査が行われた。

昭和四十六年三月二十五日、戦没船員の碑が竣工ここに、六万三千三十一人の戦没船員が奉安された。

奉安は、永久保存が可能な和紙に年月日・氏名を毛筆浄書し、五箇のステンレス箱に分納密閉の上行われた。

なお、その後判明した戦没船員および殉職船員の奉安も同様に行っている。

碑に刻まれている「安らかにねむれわが友よ 波静かなれ」とこしえに「は、一般からの投稿などをもとに企画委員会で検討されたが、最終的には西沢武男氏の「安らかに眠れ海の友よ、波静かなれとこしえに」が推挙され、一部修文され碑文となった。

第1回戦没船員 追悼式の開催

昭和四十六年五月六日、第一回戦没船員追悼式が皇太子同妃両殿下（現・天皇皇后両陛下）のご臨席を賜り、全国から遺族関係者二百五十八人が参列、来賓として橋本運輸大臣・津田神奈川県知事・長野横須賀市長・内田海上幕僚長などが出席し雨天の中で執り行われた。

この式典にご臨席賜った妃殿下は、かく濡れて遺族らと祈る
更にさらにひたぬれて
君ら逝き給ひしか
と御歌を詠まれた。



第1回の追悼式にご臨席賜った皇太子同妃両殿下
(現・天皇皇后両陛下)

戦没船員の碑奉賛会設立

戦没船員の碑も完成し、追悼式も毎年執り行える体制もできたことから、昭和四十八年五月財団法人戦没船員の碑建立会は解散し、同年六月、戦没船員の碑奉賛会が設立され、事務所を（財）日本海事広報協会内に置き、今後の追悼式等の実施に当たることになった。

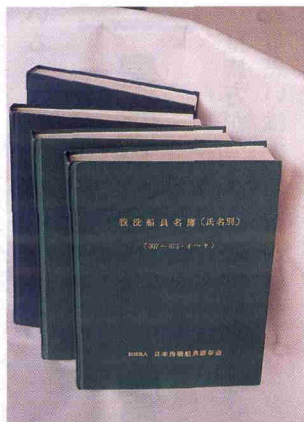
日本殉職船員顕彰会を設立

戦没船員に関わる慰霊・顕彰は、「戦没船員の碑奉賛会」によって行われていたが、戦没船員遺族からの問い合わせや調査依頼への対応、戦没船員名簿の整備等、これ等事業の一層の充実が関係者から求められた。

一方、海運関係者から戦後、海難等で殉職した船員の慰霊や遺族の援護（遺児への援護金給付等）に関わる団体設立の要望も強まってきた。
以上のような要請に応じて、昭和五十六年四月、財団法人 日本殉職船員顕彰会が「戦没船員の碑奉賛会」の事業を引き継ぎ設立された。

戦没船員名簿の整備

慰霊碑完成時に奉安された六万三千三十一人の名簿は、その後かなりの漏れや重複があることが分った。そのため、海運各社から戦没船員に関わる資料の提供をいただき再調査の結果、戦没船員は六万六百人となった。その後も毎年奉安漏れの戦没船員が分り、平成十七年五月現在で戦没船員は六万六百人となっている。
顕彰会では平成元年、新たに人名別（六冊）、船名別（六冊）の戦没船員名簿を作成した。



戦没船員名簿

殉職船員の調査と奉安

戦後の殉職船員の調査は、既に戦後三十年を経過していることから困難な面もあったが、日本船主協会・日本内航海運組合総連合会に依頼し行った。その結果、外航分野についてはほぼ把握できたが、内航分野については外航同様の把握は困難であった。
なお、水産分野については調査に取り組むことができなかった。

この調査以降は、毎年殉職船員の調査を行い（水産分野は平成十三年より）、現在二千八百三十四人が奉安されている。

遺児援護金制度の発足

昭和五十九年一月、殉職船員の遺児に義務教育終了まで援護金（月八千円）を支給する内容を骨子とした制度が発足した。

この制度は、一時期高校まで拡大されたが、現在は発足時の内容に戻っている。制度発足から今日までの延べ支給対象遺児は、千八百七十一人となっている。

戦時徴用船遭難の記録画展

元大阪商船嘱託画伯・大久保一郎氏が描かれた貴重な戦時徴用船遭難の記録画の存在が、昭和五十七年大阪で発見された。

これは、生還船員の証言を基に画かれた沈みゆく社船の記録画である。発足間もない顕彰会は、この記録画を遺族はもとより広く国民にご高覧いただくことが、戦没船員の顕彰につながるものと考え、第一回の記録画展を東京三越本店で開催した。
以後、毎年全国の主要都市で開催し、平成十六年の新潟での開催で三十回と



戦時徴用船遭難の記録画展

この間の入場者の総員は、十万余千人に上った。
また、この記録画展を通して、多くの戦没船員ご遺族に「戦没船員の碑」の建立や当会によって行われている追悼式などをお知らせすることができた。

広報誌「潮騒」の発行

ご遺族や慰霊・顕彰事業を支えていただいている多くの関係者と当会を結ぶ「絆」として、平成七年広報誌「潮騒」の発行を始めた。
以後、内容の充実に努め、現在、二千七百部を八月と十二月に発行してい

関係資料のデータベース化

戦没船員名簿（氏名・船名別）や海運各社からの提供資料（B四版五千枚）のデータベース化は、遺族等からの調査依頼や問い合わせへの迅速な対応という面で、当会の切実な課題であった。平成十四年、日本財団から初めて助成金（六百万円）をいただき、これ等関係事業を行った。

この事は、当会事業運営の近代化に大きく貢献し、併せて、これまで手作業では困難であった戦没船員や戦没船等に関する詳細な資料を検索によって得ることが出来るようになった。

戦没遺族等への周知

あの大戦が終わって肉親を亡くされた戦没船員の遺族関係者は、乗船船舶の遭難状況や肉親の最期を知る手がかりを求めているいろいろと努力されている。

一方、戦没船員の慰霊・顕彰事業を行ってきた顕彰会（前身の碑建立会・奉賛会を含む）は、遺族の住居が十分に把握できなかったことから、「戦没船員の碑」の建立や毎年の追悼式等を体系だつて遺族関係者にお知らせできなかった。

そのようなことから、今も尚、多くの遺族関係者が、戦没船員の碑や顕彰会によって執り行われている追悼式を知らない。

併せて、顕彰会には、戦没船員の名簿・戦没船（主として商船）の遭難状況等の資料や文献があるが、このような遺族関係者にお知らせ出来ずにいる。

顕彰会では、前述のデータベース化と併せてホームページの開設、各地での記録画展、マスコミ等への対応等々によってその周知に努めている。これからも尚一層の努力が強く求められている。

皇族方と戦没殉職船員

皇族方が、とくに戦没船員に寄せられる思いは深いものがある。

皇族方には、戦没船員の碑が建立さ



第30回追悼式にご臨席賜り、献花される両陛下

れ、節目の追悼式や折に触れ、次のようにご臨席やご献花ご拝礼を賜った。

○昭和四十六年五月 第一回追悼式・皇太子同妃両陛下行啓

○昭和五十三年五月 高松宮同妃両陛下ご供花

○昭和五十五年五月 第十回追悼式 高松宮陛下ご臨席

○昭和五十七年五月 昭和天皇皇后両陛下ご供花

○平成二年五月 第二十回追悼式皇太子陛下行啓

○平成三年五月 皇后陛下御歌碑除幕式 第二十一回追悼式 皇太子陛下行啓

○平成四年一月 天皇皇后両陛下ご拝礼

○平成六年五月 天皇陛下御製碑除幕式 第二十四回追悼式 皇太子同妃両陛下行啓

○平成七年九月 天皇皇后両陛下 紀宮内親王陛下ご供花

○平成十二年五月 第三十回追悼式 天皇皇后両陛下行啓

○平成十七年七月 遺族の集い 天皇皇后両陛下行啓

慟哭の旅

平成十六年度

稿 投 東部ニューギニア慰霊巡拝

新脇 弘司 (岡山県在住)

海ゆかば みづく かばね
山ゆかば 草むす かばね

いまも、太平洋、みなみの島嶼、海山川には、さきの大東亜戦争において、尊い命を捧げた幾多の英霊が静かに眠る。平成十六年十一月二十日より八日間、掲題の政府派遣団の一員として参加するを得た。ここに紹介する。一行は、厚生労働省五名、遺族代表二十七名、旅行社三名であった。

現地ではマリアア対策を怠りなく、ジャングルの中の道を、場所によっては川の増水に行く手を阻まれ、個々戦没場所を尋ね、祭壇を設え慰霊祭を挙げた。父兄弟の没地に立ち、故人を追悼し、泣き崩れる遺族の姿もあった。

私の父の没せし海は、ウエワク市から約二十哩離れた美しい珊瑚礁ムッシュ島の沖合である。船を仕立てて渡り、浜辺にて北方・日本へ向けて祭壇を設え、国旗・位牌・花輪・写真・供物を整え、大勢のはだし姿の住民が見守る中で慰霊祭を挙行了した。

沖合、船と共に逝きし経度緯度点に

て、紺碧に澄む珊瑚礁海中を見つめ、遙かなる日本の方角をおろがむ。海面に、父母の写真、五人の子供の婚礼写真、孫曾孫の名書き、南国の生花、故郷で穫れた饂米を浮かべ、父の好物であった灘の生一本を静かに漕いだ。

隣に位置するカイリル島の佇まいは、父のふるさとの海から眺める島影に驚くほど似ている。父は傷つき苦しみながら、沈み行く船橋から檣頭の日の丸を仰ぎ見、勝利と行く末の平和を念じ、いとしい妻子に、ふるさとの山川に、想いを馳せつつ没したことであろう。

父の生い立ち

父は、明治三十(一八九七)年、島根県海士郡海士村大字崎(多井区)(現、隠岐郡海士町)にて生を受けた。郷関を出しより、大阪市を生活根拠地とした。

明治来、戦中、戦後、わが海士村からは、大勢の船員を送り出して来た。

彼らは労働者団体として、戦前には掖済会、戦後は全日本海員組合を抛り所

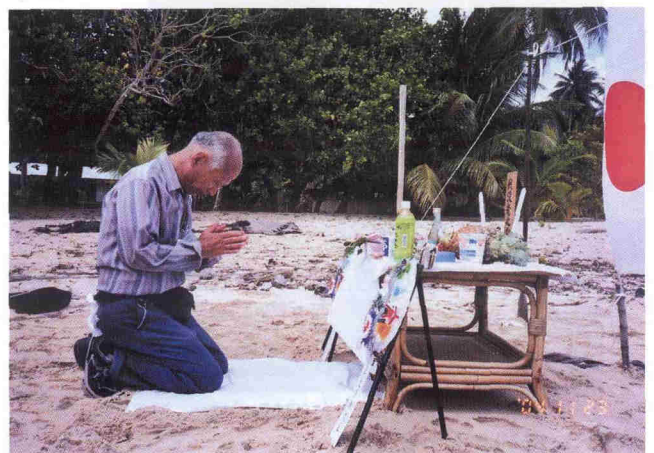
として活躍した。船員の道を選んだ父は、向上心を持ち、この機関を利用し苦学を重ね、海技免許を取得したものと思われる。そして、広大・遙かなる南の海域島々へ延びきった兵站路の確保。前線の築橋頭堡用軍需物資、武器弾薬、等の輸送の途次、昭和十八(一九四三)年、この海にて、陸軍軍属御用船船長として、お國に命を捧げ、その生涯を終えた。行年四十七歳であった。

退職を期に

父の最期を調べる

私は子供の頃から、父の終焉の海を尋ねることと共に、高齢の父が如何様に戦場に狩り出されたか。併せて、当時、全国の各師団、連隊区司令部の徴兵・赤紙発行に協業し、個人基礎資料の調査・提出を担当していた各行政役場の兵事係による、徴兵人選の仕組み、等を知るのが宿題であった。

退職後、時間を得られたことから、これらの調査につぶさに取り組むことが出来た。約五年に亘り、国家総動員法の詳細を始めに、大東亜戦争勃発の経緯、大政翼賛会、大本営週報、陸海軍作戦記録、船舶運営会の設立と運営、諸戦時海運管理令、等を調べ、さらに、防衛庁編纂戦史・東部ニューギニア戦闘記録等により、陸軍御用船運行の実体、父の勤めた輸送作戦の日時・内容・海域等の詳細が判明した次第である。



満州事変、支那事変から発展した大東亜戦争は、その戦いの様相において、所謂、大陸作戦から海洋作戦へと展開し、遠海路大規模な補給戦が遂行された。その輸送手段は船舶に頼らざるを得ず、船舶は直接の戦力としての任務をもって、参加させられたのである。

ガダルカナル島撤退を機に、東部ニューギニアへの輸送作戦は、パラオ島並びにラバウル港を中継発進港として、昭和十八年二月二十日の第一回に始まり、昭和十九年三月十八日の第二十一回・最終まで、日米空軍の鎬を削るもとに行われた。防衛庁戦史録詳述によれば、父の船は、第七、八回には我が空軍掩護により敵空爆を避け得た。が、第九次・昭和十八年九月二十

七日には、我が空軍の手違いによる掩護空白をついた敵機の空爆を被弾。ドラム缶三、五〇〇と共に炎上、海中の藻屑と消えた。輸送作戦上は、当然のことであろうか、危険な燃料弾薬類は、海トラに背負わせ、乗船兵員・搭載武器の安全輸送を図っていた。

大東亜戦争による喪失は、商船・漁船・機帆船を統合して、戦没船員六万余名、船舶七千隻を超え、八百八十万総トン、の龐大な数字である。

昭和十八年、兵役法改令により、上限四十歳が四十五歳に引き上げられた、兵員は（職業軍人を除く）この兵役年齢基準に沿っていた。これに対して、船員の徴用は諸船員管理令に基づく別扱いで年齢無制限であったとのこと。諸説の一つは云う、汽船船員死亡率は四十三%で、陸軍二十%、海軍十六%、を大きく越えると。他方、形式的には、勅令により、船長以下は佐官尉官待遇が与えられた。

三光汽船と父

父が働いていた海運会社は三光汽船であった。当時、河本敏夫社長による創設間もなく、折からの帝国の中国侵出と相まって、陸上社員海上船員が丸となって会社を発展させた時期であった（三光汽船社史より）。父は、天津（現中国）支店長を経て、船員不足の折から、再び海に呼び戻された。父が如何様に出陣したか。三光汽船社史

「社業回顧録」に河本社長の父を送り出した言葉を見出した。「それまでも、乗船中、撃沈され九死に一生を得て帰って来た。暫く休養をとり、船長がいけないので乗船を頼むと、即座に気持ちよく承諾してくれた。」とのことであった。

昭和五十八年、衆議院議員総選挙時に派閥の領袖・河本敏夫氏が遊説に来岡され、母と三人で、しばし、昔ばなし・亡父の想い出話しをする機会を得た。私は、河本さんが如何様に、如何なる基準で、父を選び、船舶運営会へ推挙し戦場へ送り出したか、直接尋ね度く、喉元まで出かけた言葉をやっとなし、押さえたことであった。多くの船員が戦没する時節柄、やはり、止むを得ないことであったのだろうか。

父の故郷・海士村に於ける、公式経度緯度の表示される木路ヶ崎灯台より遠く離れ、大圏コースを辿ること、赤道を越え、四、五六二軒に位置するムツシユ島沖合・沈没海点。

私は、会社勤務時代、海外出張に際して、飛行機の窓から雲間に見える南の島影、見えもしない遙か遠くの海に眠る父を想ったことが幾たびあっただろうか。幼き頃の幻が如き父の想い出。いまも消し去ること能わぬ、脳裏に焼きつきし、B-29の爆音、雨霰の如く降り落ちる焼夷弾の火、逃げ惑う空襲の惨状。永の歲月尋ねることを念じつつ、父の行年を越えること二十一とせ（歳）にして、願成就。珊瑚礁海に眠

る父を訪れることを得た。そして、この葬儀・戦後を終えた。

いまは、語り合い度き夫を亡くした妻・戦後の苦勞を凌ぎし母、はらからは既に亡くも。余命幾許もなき歳に至り、漸く、息子としての努めが果たせられた感である。

広島市宇品在、暁第二九四十部隊鈴木宗作隊長発行の戦死公報には、当然のことであろうか、遺品のかけらも無し。ムツシユ島浜辺にて掬いし珊瑚礁砂を、父の墓前に供える。共に眠る母も喜んでくれていることであろう。

今日の平和と繁栄の礎を築きし尊き

むっちゃん機関長半生記

遺族が明星陸郎氏の十二回忌に小冊子

明星陸郎氏

は、東京高等商船学校を昭和十一年に卒業され、先の大戦では徴用船に乗船し、戦没船員と生死をともしにされ、幸運にも生還され、戦後の海運界でも活躍された方である。

この度、氏の



車椅子で長男圭介と追悼式に参列された奥様

幾多の英霊に対して、今後とも、慰霊・巡拝の心の衰退することの無きを願ひ、本誌「潮騒」をご覧の殉職船員・戦士の遺族の方々への、慰霊巡拝の手がかり、恒久平和の推進への一助になればと。願いを込め、この巡拝記を寄稿する次第である。

父の乗りし船・神祐丸の沈没海点の特定に関する手がかりを戴いた、「財団法人日本殉職船員顕彰会」、「戦没した船と船員の資料館」、並びに、鄭重なる現地慰霊祭を執り行つて戴いた厚生労働省のご尽力、旅行社ご担当の方々に、衷心より御礼申し上げます。

十三回忌記念として奥様英子さん、ご長男の圭介さんによって「むっちゃん機関長半生記」が小冊子にまとめられ、当会にもご贈呈いただいた。

また、ご遺族は、協賛会員として慰霊・顕彰事業にもご協力され、本年の戦没・殉職船員追悼式にもご参列いただいた。

「半生記」の中には、明星氏が生前全日本海員組合の機関紙・船員しんぶん「昔の船と人」に十三回にわたって投稿されたものが紹介されている。

昭和十七年七月、日本郵船野島丸（七、一九〇総トン）が海軍の徴用船としてキスカ湾で烈しい敵襲に会い、船体を放棄してキスカ島に上陸、酷寒の地で長期間孤立した話。

同社諏訪丸（一〇、六七二総トン）で、敵襲によって擱座した一万トンクラスの第二回南丸を敵潜水艦が待ち伏せている中、トラック島から日本に曳航し、奇跡的に無事曳航できた話など、いずれも戦争中の徴用船乗組員の決死の苦勞が偲ばれる体験談である。

また、戦後の話としては、朝鮮戦争・ベトナム戦争にも明星氏は関わり、商船管理委員会・MSTS・米船運航での日本人船員の活躍や苦勞話が紹介されている。

これ等の戦争と日本人船員の関わりは、資料も乏しく意外と知られていない中で、生きた歴史の証言でもある。いろいろな挿話や寄書き、書簡さらに写真もあり、生前の氏が偲ばれる。

役員の一部変更のお知らせ

五月二十五日の評議員会および同月二十六日の理事会において、当会の役員および評議員の一部が変更された。

〔理事〕

新任 大内 博文

（社）日本船舶機関士協会会長

崎長 保英

川崎汽船（株）会長

玉置 佑介

（社）日本海員掖済会会長

齋藤 清伍（八月一日付）

全日本海員組合嘱託

新任 菅原 小五郎

新谷 功

廣瀬 好宏

秦 一生（八月一日退任）

〔監事〕

新任 角田 稔

（社）全日本船舶職員協会専務理事

片岡 和夫

（財）日本船員厚生協会専務理事

退任 佐々木 靖

田葉 行宏

新任 石原 英司

（社）大日本水産会専務理事

市川 博康

（社）日本船長協会専務理事

西村 健一

全国内航タンカー海運組合専務理事

原田 勉

全日本内航船主海運組合専務理事

退任 吉崎 清

小林 喬

大河原豊重

平川 昌治

退任にあたって

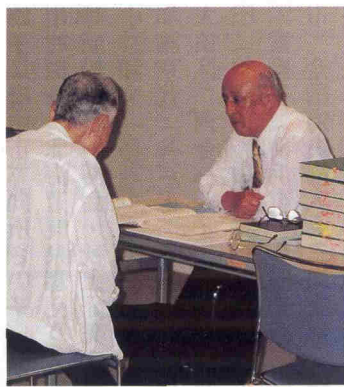
常務理事 秦 一生

この度、八年間にわたってお世話になった顕彰会を退任することになりました。

この間、ご遺族関係者をはじめ多くの方々にご支援ご厚情を賜り、改めて厚く御礼申し上げます。

私は、船員としてスタートし、海員組合・顕彰会と約半世紀におよぶ職業人生を過ごしましたが、その中でも戦争や海難などによって尊い犠牲となられた先輩諸氏の慰霊・顕彰の仕事をして頂いたこの八年間は、最も意義のある仕事として、生涯忘れ得ぬ貴い体験でした。

あの戦争と船員の悲惨な体験について



記録画展で遺族に説明する常務理事

では、乗船中先輩から話は時折聞かされましたが、顕彰会に来て改めて、戦没船員や生死をとみにされた生還船員の方々の慟哭の体験を知ることができました。

顕彰会での八年は、一人の後輩船員として、微力ではあるが何かのお役にたてればという気持ちで働かせて頂きました。

退任にあたって心に残ることは、今なお、多くの戦没船員遺族関係者に「戦没船員の碑」が建立されていることなど、関係者によって慰霊・顕彰が行われていることをお知らせ出来ずにいることです。

就任以来、遺族関係者への周知にマスコミなどへのアプローチ等々努力はしましたが、何分にも年数の経過、競争体験の風化などもあり、十分な成果は期し得ませんでした。

ご遺族の中には今も、肉親の最期を少しでも知りたいと手がかりを探されている多くの方々がおられます。

在任中にいろいろなルートで顕彰会を知り、問い合わせられた三百人近い遺族関係者に関係資料等をご送付出来たが、「もう少し早く分っていたら母にも報告できて喜んでもらえたのに」と幾人ものご遺族から聞かされ、胸が痛みました。

戦後六十年が経ちましたが、戦没船員遺族の戦後は終ってはおられません。顕彰会の益々の活躍を祈念して退任のご挨拶とさせていただきます。

新規加入協賛会員の紹介 と加入のお願い

(年一〇三千元)

海運会社の合併や金利の激減で会の運営が厳しくなっているなかで当会は、ご遺族や関係者のご協力をいただき、慰霊、追悼、援護事業を支えていきたいと平成七年協賛会員制度を設けました。お願いできる場合は、郵便払込取扱票をお送りさせていただきます。
平成十六年十二月以降、次の方々が賛助会員・協賛会員に加入されました。ここに厚く御礼申し上げます。
(敬称略・順不同)

◆賛助会員

社団法人 大日本水産会、日本鯉鮪漁業協同組合連合会、全国漁業協同組合連合会、佐藤藤枝

◆協賛会員

関根 裕、阿部健一、小川 治、内田 光江、吉澤重榮、海北敏子、中田紀代子、大川晴美、佐藤朝子、佐藤千恵子、渡部博斗、友田謙一、小林茂隆、横澤栄治、濱田勝彦、明星英子、磯 とき、篠原柳一、加藤京代、金沢梅次、杉原龍三、山本艶子、飯島 晃、小川直行、静友己枝、古梶美穂、武田晴重、笠原倫子、竹内彪、山岸由紀子、高橋弘江、友田三郎、山科順、大庭みつ子、森田啓治、松下トシエ、錦戸輝子

ご寄付・追悼式献花料

平成十六年十二月以降、次の方々からご寄付並びに追悼式の献花料をいただきました。あらためて厚く御礼申し上げます。
(敬称略・順不同)

◆寄付金

岩澤純造(横浜市) 新藤博志(横浜市) 高橋 繁(松戸市) 山下琥生(東京都世田谷区) 海軍思想普及研究会(神戸市) 河合ハル子(横浜市) 山本艶子(伊勢原市)

◆献花料

川畑實恵(明石市) 伊藤慎介(東京都千代田区) 河方満智子(豊中市) 福井 實(京都府乙訓郡大山崎町) 小林義隆(篠山市) 全日本船員生活協同組合(横浜市) 長田利美(川崎市) 岩佐義一(三鷹市) 増田篤彦(三浦市) 阪口勝子(草津市) 糸 美那子(藤沢市) 福岡海寿会会長・門田富雄(福岡市) 渡辺 光(小野田市) 福田陽子(長崎県南高来郡小浜町) 山田利政(松江市) 米山隆昭(東京都北区) 高等商船学校三期會(東京都北区) 三木千代子(丸亀市) 古館リミ(岩手県上閉伊郡大槌町) 西嶋 忍(大阪市) 鴨志田米造(松戸市) 山下義韶(神奈川県中郡二宮町) 宮越太郎(佐倉市) 稲垣義夫(神戸市) 大和田吉雄(茨城県東茨城郡大洗町) 長野ヨネ子(東京都中野区) 内藤福治郎(野田市) 山川澄男(横浜市) 藤井

靖子(府中市) 向所さい子(洲本市) 川村誠勝(北海道幌泉郡えりも町) 高等商船学校一期會・秋山好美(横浜市) 小林和夫(横浜市) 猿渡國雄(横浜市) 加藤京代(神戸市) 五味和夫(東京都大田区) 河合ハル子(横浜市) 西川克巳(神戸市) 山本艶子(伊勢原市) 鈴木富喜子(横浜市) 金田光蔵(鹿児島市) 全国海友婦人会三崎支部・橋本則子(三浦市) 飯田喜久三(東京都渋谷区) 財団法人偕行社(東京都千代田区) 森 忠(横浜市) 三宅 弘(逗子市) 社団法人日本中小型造船工業會会長・石渡 博(東京都港区) 沢畑美恵子(日立市) 日本郵船郵和會(横浜市) 庄司和民(藤沢市) 武馬竹光(一宮市) 横尾英二(逗子市) 相田和男(横浜市) 古川 昭(日立市) 吉野 明・曾根幸雄・原 昭三・塚田淳夫(横浜市他) 大木義男(越谷市) 浪速タンカー株式会社代表取締役社長・福岡孝一(東京都港区) 海謡會会長・本戸幸雄(横浜市) 財団法人水交會(東京都渋谷区) 才津俊朗(横浜市) 財団法人船員保険會會長・佐々木典夫(東京都渋谷区) 財団法人船員保険會常務理事・大曾根義克(東京都渋谷区) 明星英子(横浜市) 善積加代子(北海道十勝郡上磯町) 根本靖子(瀬戸市) 高垣宏江(神戸市) 谷本光代(善通寺市) 横須賀海洋少年団父母の會(横須賀市) 横須賀海洋少年団(横須賀市) 伊藤春子(豊田市) 渡辺政能(藤沢市) 全国戦没殉職船員遺族會會長・堀田明道(横浜市) 高垣幸徳(神戸市) 鈴木正巳(横須賀市) 鹿児島商船学校同窓會京浜支部長・内

村禎介(東京都中央区) 三輪史郎(富里市) 橋本恭子(八街市) 稲葉 燁(横浜市) 虎頭とし江(鹿児島市) 竹股静枝(東京都江東区) 海員組合職員OB會(横浜市) 貝谷アキ子(一宮市) 海防艦頭彰會(東京都渋谷区) 久我吉男(横浜市) 新田尚子(宇部市) 中村良秋(松戸市) 平野 彌(横須賀市) 横須賀市東部漁業協同組合鴨居支所長・斉藤嘉則(横須賀市) 萩原友次(小田原市) 高木 理(泉佐野市) 三軒谷町内會(横須賀市) 池原田鶴(横浜市) 大田要子(高知県幡多郡大方町) 河内哲夫(岡山県久米郡久米南町) 鴨居地区町内會連絡協議會會長・清水松三郎(横須賀市) 全国海運組合連合會會長・四宮 勲(東京都千代田区) 小泉義男(日立市) 水沼 清(流山市) 長島 弘(横須賀市) 森田福二郎(東京都杉並区) 鈴木富美子(横浜市) 丸木百合子(横浜市) 佐野三郎・佐山栄一郎・鈴木 誠(横浜市他) 田中千賀子(尼崎市) 高橋弘江(藤沢市) 北内美穂子(尼崎市) 都竹利年雄(東京都杉並区) 大竹キミ(横浜市)

事務局について

左記の構成員で業務を遂行しておりますのでよろしくお願ひ致します。

事務局長 富澤 英二

職員 伊藤 虔二

職員 田中佐代子

尚、職員、渡辺貴代美は昨年十二月末日で、前事務局長、柴 静夫は三月末日で退職致しました。